保育者と子どもの多義的な関係性へ
― 笑いがつくる豊かな関係 ―

堂本真実子
（幼稚園園長）

研究発表の場から

私立幼稚園の多くは、「全国私立幼稚園連合会」に所属しており、毎年各地区で研究発表を行う。今年八月の四国大会では、本園の教頭が、子ども理解とクラス運営の問題について、二年越しの研究を発表した。子ども理解についての実践発表といえば、一人の子どもに焦点を当て、その子の成長について論じるものが圧倒的に多い。しかし、保育者は一人を相手にしているのではなく、一人ひとりを相手にしている。そこには、援助の緊急性についての判断があり、一人ひとりについての異なる理解がある。また、クラスというまとまりに対しても、子どもと自分がどのような距離感で居るのかという感度も重要である。この研究は、ある一人の子ども理解の事例を超えて、保育者のクラスのリーダーとしての切実な問題に切り込んでみたものであった。

要点は二点。保育者がクラスのまとまりをつくっていく上で、一人ひとりの子ども理解を背景に、さまざまな場面を通じて丁寧な信頼関係を築いていくことと、子どもと保育者の距離を測りながら、ふざけあったり、子ど

堂本真実子（どうもと まみこ）
認定こども園若草幼稚園（高知県高知市）園長。高知大学非常勤講師、他。教育学博士。ブログ「園長せんせいの部屋」（若草幼稚園 HP 内）http://wakakusa-kochi.ed.jp/encho/

もの拒否を大げさに演じて受け入れたりしながら、その在り方に多義性を持たせることの重要性である。

さて、私が興味深く感じたのは、次の日の百二十名からなるグループ協議において、この研究の二つ目の視点が、まったく論点として挙がってこなかったことである。議論されたのは、さまざまな子どもの課題の大きさと問題解決の方法であり、保育者と子どもの関係性を問う内容は出てこなかった。

多くの保育者は無自覚のうちに、常に問題解決を図る存在として、間違いが許されない存在として、子どもの前に立っているのではないだろうか。

「保育者」という存在

私は、学位を取るまで、ずっと子どもの笑いを研究してきた。博士論文では、小学校の授業における笑いについてフィールドワークを行った。もう二十年以上も前になるが、当時は笑いについての統一的な定義はなかった。主に優越を感じて起こるもの、ズレの認知によって起こるもの、緊張が解放されて起こるものという説が有力であった。いずれにしろ、対象の価値の下落によって笑いはよく起こる。

保育者は子どもを育てる立場にあり、基本的に、何かを「させる」立場にある。いまだに一斉活動中心の園ともなれば、その立場はいっそう強くなるだろう。保育者が「させる」立場としてその存在を一義的に強めていくと、子どもは、そこから逃れようと逸脱するか、「いい子」の仮面をかぶるようになる。そうして、ある子は失敗を極度に恐れるようになり、ある子は隠れて負の感情を表すようになる。先の研究発表では、「させる」立場が強くなっていた自分を自覚し、保育者が子どもの

試し行動を積極的に受け入れ、共にふざけたり、笑いによる価値の下落を、笑いによって受け入れたりすることで、所属意識の高い、活気あるクラス集団へと変わっていったことが語られた。

余談だが、私はまったく別の次元で自分の存在を揺らしている。それは「園長やまんば説」である。この説の定着には五年かかった。ふとした子どもとの井戸端会議で、「実は夜中の十二時になると……」と言って回ってきたのである。一度、降園後に遊んでいた園児が、そばを通りかかった私に「まみこ先生って、やまんばながでね」と言った声が園庭に響き渡り、恥ずかしかったことがある。去年は、お泊り保育で、私が本当に「やまんば」であるのか看破しようと考えたり、食べられるのではないかとひそかに心配する子もいたりしたが、今年の子たちは、どうでもよさそうであった。子どもが「まみこ～」とたたいてくると、「食べるで！」「食べるで!!」と追いかけることもある。子どもたちは、私のことを「園長先生」と呼んだり、「まみこ先生」「園長どうもとまみこ」「まみこ～」と、いろんなふうに呼ぶ。それぞれの子どもが持つ関係の距離感と質、そしてその時の気分はさまざまである。

保育者が自分の存在を揺らすことができるには、ある程度、本人の個性によるところも大きい。ユーモアのある人間のほうがたやすいだろうし、貫録の余裕というものも必要だろう。崩れても元に戻せるという自信がなければ、崩すことはできない。研修で、一年目の人の悩みを聞いていると、子どもは崩れっぱなしで、涙ぐましいものがあった。

個性を超える園の文化

こうした保育者の個性を超える装置として働くのが、園の文化である。私たちの地域の

小学校では、毎年音楽会で先生が女装して踊る文化があるが、本園の場合は、「水のぶっかけあいこ」と「泥遊び」である（冬には、「落とし穴大作戦」がある）。「今年も……」「そろそろ」という気分で始まる「水のぶっかけあいこ」は、点から線へ、面へと瞬く間に広がっていき、園庭中が水しぶきに彩られる。先生と子どもは、先生と子どもを超えて、ただの水をぶっかけあう人同士になる。ひたすら、水をため、顔面にぶっかけ、いかにターゲットを選定し、水を効率よく飛ばすかに意識が集中する。ここには、何か壮大な音楽が流れている。そして、この一体感と解放感には、何ものにも代えがたい純粋さがある。泥遊びの場合もそうである。汚し、汚され、子どもと先生は無記名になる。そこで生まれる親和的気分こそが、子どもと保育者の生身の信頼関係をつくっていく。

また、このように心が解放された子どもは、とても常識的な態度を示すようになる。いつでもどこでも先生を汚してよいわけではないことに気を回し、「先生、今日は着替え、持ってる？」などと、あらかじめ聞いてきたりする。これこそが、規範意識の芽生えというものであろう。

笑いや自由や解放感の傍らで、規範意識や節度というものが育っていく。もちろん、その規範意識や節度を保育者が持っていることが大前提である。そのことも現代では留意すべき点となってきたが、多義性を持つ保育者の存在と園の文化の創成が、園長に求められる仕事の一つと言えるのではないだろうか。

写真　篠木 眞